

<祈りのために>

主に望みをおき、主の道を守れ。主はあなたを高く上げて、地を継がせてくださる。

(詩篇 37 篇 34 節)

「主に逆らう者は待ち構えて、主に従う人を殺そうとする」(32 節) のです。主に逆らう者は、神の言葉を聞いて従うことが誇りのないだらしない人間だと思ふのです。そしてすぐに支配権を振り回して、対立関係をもって敵対するのです。彼らは、自分達の立てた偶像に頼っております。金に頼り、権力に頼り、家系と学歴と肩書を誇っており、自分達の世界では大威張りです。宗教と絡んだ風俗習慣が絡みついている国家体制の中で、胸を張って威張り散らせば散らすほど、世界ではますます孤立して千鳥足でよろけるのです。

この世が力とする力を、神は力にさせません。彼らが力とするものを力としない信仰者の生き方は、彼らにとって自殺行為と思われるほど恐ろしい道です。勢力もない。多数でもない。金持ちもない、力もない。家や親族の結集もない。学歴や名声もない。この世のこねもない。それでどうやって生きて行けるのかと言います。神を無視し神を知ろうとしない者は、意識してもしなくても真剣で夢中で自分が何かをやっている時は、神に敵対するのです。それがこの世であり、神を知らない者の姿です。

「主は御自分に従う人がその手中に陥って裁かれ、罪に定められることをお許しにならない」(33 節) のです。信仰者は、四方八方から主に逆らう者らに取り囲まれ、さまざまな危険な恐れが生じる時、神が保護して下さいます。神の保護の仕

方は「あなたがたは、これ(鞭打たれること)を鍛錬として忍耐しなさい。神は、あなたがたを子として取り扱う」(ヘブル書 12 章 7 節) ことにあります。私たちは自分の主人は自分であるという自己愛があるために、神はご自分の子として自覚させるために、苦難の中で屈辱を与えて挫折させて、砕いて謙虚にさせたもうのです。ここから私たちは、自分の偽善と弱さを自覚し、自分に信頼を置かないで信頼を神に向けて、神を呼び求めるのです。平穩無事でいるときは、神の恵みを忘れて、自分の信念が人以上に固く持っていると思ひ上がるからです。

「主に望みをおき、主の道を守れ」と、ダビデは語ります。私たちはキリストの十字架を背負うように召されております(マタイ 16 章 24 節)。これは父なる神のご意志であり、その御子キリストが私たちに求めておられます。キリストは「多くの苦しみによって従順を学ばれ」(ヘブライ 5: 8) ました。逆境と苦難に与ってキリストが神の栄光に入られたように、私たちもさまざまな艱難を経て同じ栄光に導かれると約束して下さいました。パウロは「私は、キリストとその復活の力を知り、その苦しみに与かって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者からの復活に達したい」(フィリピ 3 章 10、11 節) と語っています。私たちも十字架を担って苦しめられれば苦しめられるほど、キリストとしっかり結合されるからです。

<祈り> 父なる神よ、あなたの憐みの光は、私たちが苦しみに遭わせて傲慢な自分自身に鞭を打たれます。あなたを知らない時は、復讐の思いが高まって興奮していましたが、それがあなたの愛のみ手であることを自覚して、へりくだって罪を悔い改める者にして下さい。ここから、隣人の叫びを自分の痛みにしようと努力する十字架を担う者にして下さい。川越弘(沖縄伝道所牧師)

## 新シリーズ開始『その時に備えて 憲法問題 Q&A』を読む(7)

芳賀繁浩(豊島北教会牧師)

**Q7 民主主義について、具体的に考えるべき事柄は何ですか？**

**A7 (前号よりの続き)**

最後にキリスト者の責任です。私たちも日本社会の一員です。私たちもまた、国民主権、基本的人権、法の支配といった、民主主義の原則をキリスト者の視点から考え、公権力と向き合わなければなりません。

教会と権力の関係が問われる時、よく引用されるのが「**上に立つ権威に従うべき**」(ローマ 13:1) という聖句です。先に記した通り、教会と国(公権力)は、共に神の主権の下にあります。私たちが従い得るのは、「**上に立つ権威**」が神のみこころに適っている時です。そうでない場合、私たちは神に従うことを選び取ります。正しく判断するためには公権力の動向を注視していなければなりません。そうでなければ、この聖句を隠れみのにした、権力への無批判な追従が起こります。また、民主主義社会においては、主権者は私たちですから、「**上に立つ権威**」は単なる「お上」といった他者ではなく、私たちの責任にも関わります。教会が権力の動向に無関心であることを、この聖句によって正当化することはできません。

ナチスの圧政下、抵抗運動をした牧師ニーメラーの、次のような言葉が残っています。

ナチスが共産主義者を攻撃した時、私は不安を感じたが、共産主義者でなかったので、何もしなかった。  
ナチスが社会主義者を攻撃した時、私は不安を感じたが、社会主義者でなかったので声を上げなかった。  
それから学校、新聞、ユダヤ人が攻撃され、私は不安になったが、なおも何ごとも行わなかった。そして、  
ナチスが教会を迫害した時、私は教会の人間であったため行動を起こした。しかし、手遅れであった。

**新Q7-3** 聖書は、政治について「民」の責任についてどのように語っていますか？

**新A7-3** 神様によって奴隷の地(エジプトの神政政治!)から解放された神の民は、誰もが(外国人や奴隷も含めて)等しく働き、等しく休むことを命じる安息日律法が教えるように「神様以外全員平等」な共同体であることが求められました。

戦争の時さえ、神様がその時々を立てられた「士師」によって率いられたいわば義勇軍がその任に当たり、戦いが終わると士師を含めて全員が一人の民に戻ったのです。

それが変質したのは、神の民自身の「他のすべての国々のように、我々を裁く王を立ててください。」(サムエル記上 8:5)との求めによるものでした。この求めに対して神様が告げた「王のならわし」のリアリティは現代の政治学の視点から見ても驚くほどです。

この、神様のみ心に反して立てられた王は、常に預言者を通して神の言葉によって批判され、正されなければなりません。そしてその批判の中心は「みなしご、やもめ、寄留の外国人」と表現される、弱い立場に置かれた人たちの側に立っているかどうかということでした。「弱い」人を「強い」人から守ること、それだけが地上の権威と権力とを正当化するのです。

**新Q7-4** 神の民であるイスラエルと世俗国家である現代の国家とを同じように考えることはできないのではないのでしょうか？

**新A7-2** 神様は全地の支配者であり、すべての権威の源です。それゆえ神様の支配のおよばないいかなる場所もこの地上にはありません。そして、神様はその権威と支配のあるべき姿を、キリストを通して示されました。「仕えられるためではなく、仕えるため」に来て下さったキリストの姿こそがすべての権威のあるべき姿なのです。

英語では総理大臣のことを「プライム・ミニスター」と呼びますが、これは文字通りには「第一のしもべ」の意味です。ここには長い歴史の中で聖書が政治に対して与えてきた影響を見ることができるでしょう。

日本国憲法の第15条にも「公務員を選定し、及びこれを罷免することは、国民固有の権利である。すべて公務員は、全体の奉仕者であって、一部の奉仕者ではない」とありますが、ここにも同じ響きを聞くことができます。

私たちは、キリストの王権に服し、その預言者の職にあずかる者として、地上の権威と支配を見張り、声を上げ、ときには(非暴力の)直接行動によって正しい道に立ち帰るよう働きかける責任を負っているのです。

首相・閣僚によって繰り返される靖国神社参拝・真榊奉納に強く抗議します

内閣総理大臣 岸田文雄様  
厚生労働大臣 加藤勝信様  
経済産業大臣 西村康稔様  
経済安保担当大臣 高市早苗様

岸田政権の閣僚たちが、春と秋に行われる靖国神社の例大祭の度ごとに、参拝や真榊・玉串料の奉納を繰り返していることに、私たちは良心を痛め、憤りを新たにしています。

高市大臣は「国策に殉じられた方々の、み霊に感謝のまことをささげた」と述べましたが、靖国神社に祭られているもののなかには、日中戦争から太平洋戦争に至る一連の無謀な戦争を企画、実行した責任者である A 級戦犯だけでなく、隣国において、現地の人々を相手に日本刀の試し斬りを行ったり、赤ん坊を投げ上げて銃剣で突き刺したり、婦女子をレイプしたり、無慈悲で無意味な放火や殺戮を繰り返したりしたものたちが、少なからず存在します。国策に殉じたといいますが、多くのものは飢餓や伝染病、栄養失調によって命を失い、水死や凍死も数知れず、決して「感謝のまことを捧げる」ような崇高な犠牲ではありませんでした。あの戦争で命を落とした一人ひとりの思いや遺族の気持ちを捨象して十把一絡げに感謝を押しつけるのは、死者に対する冒瀆であり、残された者たちに対するハラスメントというべきです。

あなたがた、国策を講ずべき職務を担う公人たちが、誤った国策によって絶命した人々を英霊とたたえて美化するならば、あらゆる国策が正当化されてしまいます。それは、国策のために犠牲を強い、命を投げ出すことを要求するに等しい行為です。むしろあなたがたのなすべきことは、誤った国策が、いかに多くの人命を奪い、家庭や社会を損ない、幾世代にもわたって近隣諸国との関係を修復困難なものに陥れるのかという歴史の教訓に学ぶことです。

聖書には、最初の殺人がどのようにして行われたのかが詳しく書かれています。それは兄弟殺しでした。弟を殺した兄に対して、神は「あなたの弟の血の声が土の中から私に叫んでいます」(創世記 4 章 10 節)と言われました。かつての戦争で命を落とした多くの人々の遺骨が、いまだにアジアの各地に無残に放置されておりますが、あなたがたが靖国神社においていかなる儀式や行為をなしたとしても、かつて流された血の声は、いままもアジア各地の土の中から、私たちに叫び続けているのです。

現在、国会では自由民主党と旧統一協会との癒着を解消すべきことが議論されています。それならば、かつて、アジア全体を狂気と殺戮の渦に巻き込んだ、あの侵略戦争を正当化し、犠牲者たちを美化して国策に殉じるものを作り出そうとする皇国史観の象徴たる宗教法人靖国神社との関わりこそ、断絶して頂きたいと願います。土の中から叫ぶ骨や血の声を聞くのは難しくても、私たちのような国家と特定宗教との癒着に反対する者たちの声明や近隣諸国による異議申し立ての声が聞こえないとは言わせません。岸田政権は「聞く力」を誇示しているのですから。

2022 年 10 月 23 日  
日本キリスト教会靖国神社問題特別委員会  
委員長 小塩海平

## <ヤスクニ問題関連ニュース>

### ○政治家の国葬、現代で成立せぬと実証 研究者がみた安倍氏国葬

安倍晋三元首相の国葬が27日、国民の世論が二分される中で行われた。吉田茂元首相以来、55年ぶりの戦後2例目の国葬。国葬について研究してきた宮間純一・中央大文学部教授（日本近代史）は「国葬の体をなしておらず、政治的にも何も生まなかった。政治家の国葬は現代では成立しないことが実証されたのではないかと総括する。（毎日新聞 2022.09.30）

### ○安倍氏国葬には「違憲・違法行為が多数」 弁護士や法学者らが抗議声明

先月の安倍晋三元首相の国葬で「違憲・違法な行為が数多くなされた」として岸田文雄内閣に抗議するため、弁護士や法学者らでつくる「改憲問題対策法律家6団体連絡会」は3日、国会での徹底検証を求める声明を発表した。

臨時国会の開会に合わせ、6つの団体の幹部が東京・永田町の衆院第2議員会館で記者会見した。声明では、国葬の内容が「安倍政治の称賛に終始し、式次第は軍国主義や天皇主権を彷彿させ、国民主権と平和主義という日本国憲法の基本原則に抵触する可能性が高い」と指摘している。連絡会は開催前から「国葬は憲法違反」と主張し、国会正門前であった国葬当日の抗議集会に主催団体として関わった。声明は、稲（いな）正樹・元国際基督教大教授らがとりまとめた。（東京新聞 2022.10.03）

814号ヤスクニ通信 2022年11月13日

発行 日本キリスト教会靖国神社問題特別委員会

発行人・編集・発行 小塩海平（東京告白教会）

### ○首相、靖国神社に真榊奉納 秋季例大祭、 参拝は見送り

岸田文雄首相は17日、東京・九段北の靖国神社で始まった秋季例大祭に合わせて「内閣総理大臣 岸田文雄」名で「真榊」と呼ばれる供物を奉納した。関係者によると、首相は18日までの例大祭中の参拝は見送る。首相は就任直後だった昨年10月の秋季例大祭、今年4月の春季例大祭でも同様の対応を取っている。

閣僚では、西村康稔経済産業相が14日、例大祭を前に参拝。超党派の議員連盟「みんなで靖国神社に参拝する国会議員の会」は18日に一斉参拝する予定だ。

（共同通信 2022.10.17）

### ○韓国政府 岸田首相の靖国神社供物奉納 に「深い遺憾」

韓国政府は17日、東京の靖国神社で秋季例大祭が始まったことに合わせ、岸田文雄首相が「真榊（まさかき）」と呼ばれる供物を奉納し、高市早苗経済安全保障担当相が参拝したことについて、「日本の過去の侵略戦争を美化し、戦争犯罪者を合祀（ごうし）する靖国神社に日本の責任あるリーダーらが再び供物を奉納したり参拝を繰り返したりしたことに深い失望と遺憾を表す」とする報道官論評を発表した。

論評は「日本の責任ある人たちが歴史を直視し、過去の過ちに対する謙虚な省察と反省を行動で示すことを促す」と強調した。岸田首相が就任後、靖国神社に真榊を奉納するのは4回目となる。現職首相による靖国参拝は2013年（当時の安倍晋三首相）を最後に行われていない。（朝鮮日報 2022.10.17）

<編集後記> 靖国神社問題全国協議会は、11月29日（火）の夜、「ウクライナ報告：戦争と人間の安全保障」のタイトルで、木村公一牧師（日本バプテスト連盟福岡国際教会・糸島集会）にお話し頂きます。同封したチラシに記載されているZOOMの情報を参照下さり、ご参加ください。 K.K.